

一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを書きなさい。

- ① 建物をシュウチクする。
- ② イシツ物を交番に届ける。
- ③ 野球のシンゼン試合が行われる。
- ④ 条約が国会でショウニンされる。
- ⑤ 非難を浴びた友人をベンゴする。
- ⑥ 若気の至りで無茶をした。
- ⑦ 主君に忠誠をちかう。
- ⑧ この山は、かつて石炭の宝庫だった。
- ⑨ 首相の去就が注目される。
- ⑩ 新作映画の寸評を読む。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注意) 字数制限のある問題は、句読点や記号なども、一字として数えます。

中学の音楽の葛城先生は、元テノール歌手で、ドイツに住んでいたこともあり、白髪頭をオカッパにしてて、やたらと丁寧な言葉遣いでしゃべる。ヘンな先生だなあと思っていたら、ほんとにヘンなことを言い出した。再来週の実技テストを男女のペアで歌えってのはどうよ？ それも出席番号順とかじゃないのよ。

「せっかく男女で歌うのですから、お好きな方と約束するといいいです。これぞと思う方に申し込みをしてください」
もう音楽室は悲鳴の嵐。

「ただし、男性は女性の申し込みを断ったらいけませんよ。三人に申し込まれたら三回歌うようにね」

「あぶれたヤツはどうなるんですか？」

こう聞いたのが、いかにもあぶれそうな柔道部の重量級の工藤寛だから笑えたけど。

「その場合は、あぶれた皆さんで大合唱しましょう。良いお点はあげられませんがね」

冗談！ あぶれ者の大合唱なんてそんなみつともないことさせられたら、次の日から顔をあげて廊下を歩けないよ。クラスで付き合ってる彼氏がいたり、気安く一緒にやろうって声かけられる男子の友達がいればいいけどさ、いないもんね。そんな A ばっかじゃないんだよ。

その日から、話題と言えば音楽テストのことばかり。ウチらのグループは、彼氏持ちが一人いて、アヤは同じ体操部の吉田に声かけるって言ってたけど、サッチとリエと私はまるでアテがなし。

「加瀬くんのことについてちやおうかな」

ってリエがぼそつと言った。バスケット部の加瀬はよくモテル男で、クラス一の美女の磯貝をゲットして嫌味なほど完璧なペアを作っていたけど、他にも二人の女の子から申し込まれて注1ハーレム状態になりつつある。

① ボランティアで工藤くんに行こうかな」
サッチもぼそりと言った。

「どっちがボランティアなんだよ」

と突っ込んでみたけど、二人とも自分から申し込むつもりらしくて、私はあせった。

「美緒はどうするの？」

いきなりサッチにずばりと聞かれて、私はうめいた。もし、自分から動かなければならないのなら、彼（かれ）しかない——という人がいた。好きとかいうんじゃないけど、気になる子なんだ。軟式（なんしき）テニス部の三野田（みののだ）司（つかさ）。背（せ）が低（ひ）くて痩（や）せていて、地味（ぢみ）なタイプだけど、声がキレイなんだよね、ボーイ・ソプラノで。一学期（がく）の歌のテストで、みんなが恥（は）ずかしがったり緊張（きんじやう）したりする中、キレイな声を張り上げて堂々と歌っていた。ほんとに楽しそうに。後（ご）から、「歌（うた）よかったよ」って声（こゑ）かけたら、急に恥（は）ずかしそうな顔（かお）になって「よくないって。ガキ（ガキ）の声（こゑ）で」って笑（わら）っていた。

どうしても男子（おとこ）とデュエットしないといけないなら、三野田（みののだ）がいいな。でも、あいつ、好きなコ（こ）いるって噂（うわさ）なんだよね。私（わたし）と同じ書道部（しやうだふ）の藤川（ふじかわ）さん。すらっとした物静（ものしず）かな美人（びじん）で三野田（みののだ）よりだいぶ背（せ）が高い。よく見（み）とれてるの、知（し）ってるんだ。藤川（ふじかわ）さんはまだペア（ぺあ）が決（き）まってるみたいだから、三野田（みののだ）は思い切（き）って申し込（こ）むかもしれない。邪魔（じゃま）できないよね。

なんだか急に三野田（みののだ）と藤川（ふじかわ）さんのことばかり気（き）になってしまっ、休み時間（やすみじかん）なんか、いつも二人（ふたり）がどこ（どこ）にいますか（か）って捜（さが）してる。ペア（ぺあ）はどんどん決（き）まってる。クラス一（いっ）おとなしい小川（おがわ）香（か）がクラス一（いっ）うるさい金沢（かなざわ）尚（なお）人（ひと）に申し込（こ）んだり、山口（やまぐち）宏（ひろ）樹（き）がついでに恋（こい）の告白（こひがく）もして林（はやし）麻（ま）美（み）とカッ（か）プル（ぷる）になったり。リエ（リエ）は加瀬（かぜ）グループ（グループ）に参加（さんか）。サッチ（サッチ）はまだ工藤（くどう）を捕（つか）まえていない。

部活（ぶくわく）で藤川（ふじかわ）さんと隣（となり）の机（き）になった時（とき）、聞（き）いてみた。音楽（おんがく）テスト（テスト）どうする？（どうする？） っ（っ）て。

「私（わたし）、あぶれると思う」

藤川（ふじかわ）さんは生真（きまじめ）面目（めい）にそんなことを言う。

「私もー」

大声（おおいこゑ）で同意（どうい）すると、顔（かお）を見合（みあ）わせて爆（ばく）笑（しょう）した。藤川（ふじかわ）さんで、こんなゲラゲラ笑（わら）う人（ひと）なんだ。部活（ぶくわく）が一緒（いっしょ）でもなんとなく近寄（きよ）りがたくてあんまり口（くち）きいたこともないんだけど。三野田（みののだ）のことをしゃべろうかなって思（おも）ったけど、なんて言（い）ったらいいのかわかんない。

「もったいない。ビジン（ビジン）さんなのに」

代わりにそんなことを言う、と、

「美緒（みお）のほう（ほう）がしゃべりやすいよ」

と藤川（ふじかわ）さんは言（い）うのだ。

「私は、ダメ（だめ）だなあ」

「ダメ（だめ）なんて言（い）うなあー」

背（せ）中（ちゆう）をドシ（どし）ンと叩（たた）くと、藤川（ふじかわ）さんは涼（すず）しい顔（かお）立（た）ちでニツ（に）コリ（り）して、^②その目（め）が少（すく）しだけ淋（さび）しくて、私（わたし）はなんか胸（むね）がきゅんとした。三野田（みののだ）はきつと彼女（かのじよ）のこんなところが好き（すき）なんだって思（おも）って。

男子（おとこ）を待ち伏（まちふ）せするって意外（がい）とむずかしくて、三野田（みののだ）をやっと捕（つか）まえたのがトイレ（トイレ）の前（まえ）で、何（なに）？（？）って聞（き）かれて、こんなとこで言（い）いたくないや。廊下（らうか）のはしっこまで引（ひ）っ張（は）っていつ（いつ）て、音楽（おんがく）テスト（テスト）のことを尋（たず）ねた。まだ決（き）まってるかと答（こた）えるので、思（おも）い切（き）って言（い）った。

「あのさあ、三野田（みののだ）さ、藤川（ふじかわ）さんに申し込（こ）みしてみない？（？） あのコ（こ）もまだ決（き）まってるなくて、自分（自分）から声（こゑ）かけたりできないみたいだし、もしよかったらさ……」

言いながら、すぐくへんなことをしてると思（おも）った。 B みたいだよ。

「なんでよ？」

三野田（みののだ）は妙（みょう）にクールな目（め）をしてる。

「や、だから、三野田（みののだ）は藤川（ふじかわ）さんのこと……」

私は言（い）いかけて絶句（けつこ）して赤面（しやくめん）した。何をや（や）っているのだ、おまえ、——^{ひろや}広谷（ひろや）美緒（みお）。

「だから、なんで広谷（ひろや）さんがそんなこと俺（われ）に言（い）にくるのさ？」

昨日（きのう）の部活（ぶくわく）の時（とき）に見（み）た藤川（ふじかわ）さんの目（め）が……なんて説明（せつめい）できないよ。困（こま）りきって黙（だま）っていると、三野田（みののだ）は聞（き）いてきた。

「で、広谷（ひろや）の相手（あて）は？」

私は両手（りやうて）でバツ（バツ）テン（テン）を作（つく）ってみせた。

「おまえ、人の世話（よちや）、焼（や）いてる場合（ばあい）？」

呆（あき）れた声（こゑ）で三野田（みののだ）に言（い）われて、私は力（ちから）なくハハ（ハハ）と笑（わら）った。恥（は）ずかしくて死（し）にたい。

「どうよ？（どうよ？） 俺（われ）」

三野田（みののだ）は自分（自分）の鼻（はな）を指（さ）差（さ）して尋（たず）ねた。

「広谷（ひろや）、俺（われ）と歌（うた）わね？」

「ええー？」

カ一杯叫んでしまい、三野田はショックを受けたように廊下の床にへタリこんだ。

「だって、私のこと好きじゃないでしょ？」

普通は聞けないような質問をぶつけると、

③「これは、そういうことじゃないでしょ？」

真面目な顔で見上げて答える。私は自分を馬鹿だと思ふのも忘れて、三野田って意外と渋くてカッコイイと思った。

「広谷、前に俺の歌、誉めてくれたじゃん」

三野田は座ったままで言った。

「あれ、けっこう嬉しかった」

「うん」

「やろうよ」

「……うん」

ペアが成立してしまった。どうしよう？　こうなることを望んでいたのに、いや、だからこそ余計に自分が
C
みたいな気がした。

葛城先生からノートを預かっている加瀬のところにペアを組んだことを二人で言いに行くと、すぐにクラス中に知れてしまった。どっちが申し込んだかというのをみんなに聞かれて、直接は三野田だけど元々は私がおかしな展開をどっちとも言えなくて、「成り行きで」とモゴモゴやってると、④「やっぱり微妙に自己嫌悪を感じるのだった。」

「すごい、すごい、美緒」

と藤川さんはなぜか誉めてくれて、本当に後ろめたくて、

「カップルとかじゃないんだよ」

と言いわけすると、

「関係ないよ」

藤川さんも三野田のようにきっぱり言うのだった。

「私も頑張ろうかな」

藤川さん、好きな人いるの？　と聞きかけて、これはそういうことじゃないんだとあわててやめて、でも、馬鹿な私は、やっぱりとても気になるのだった。

「一緒に歌いたい人っている？」

質問を変えて聞くと、藤川さんは一瞬だけ迷ってから、「工藤くん」とささやいた。え？　あのもっさりした柔道部の？　人を人とも思わない言動が面白い奴だけ……。

「ボランティア？」

前にサッチが言っていたことを思い出して聞くと、藤川さんはきれいな眉をひそめた。

「何それ？　素敵じゃない、工藤くん」

頭の中で二人を並べてみると、巨漢とノッポの美女は意外と似合うかもしれない。

「行けー　フジカワッ」

破れかぶれで叫ぶと、藤川さんは胸に手をあてて、ドキドキするねとつぶやいた。

屋上は風が強かった。一月末の風だから、半端な寒さじゃない。私の制服のスカートはまくれあがり、三野田のネクタイも海草のように揺らぎ、髪が頭にぶつかって痛い。空は青い巨大な一枚板のようだった。

「さみい。バカさみい」

三野田は首を縮めた。

「腹の底から声出してあったまろう」

放課後は部活で時間がないから昼休みに練習をしようと言って、三野田は私を引っ張ってきたのだ。がらんとした極寒の屋上。音楽室なんて行かないところが三野田らしいけど。

藤川さんが工藤に申し込んだことでクラスは大騒ぎになっていた。工藤がどんなに照れまくって喜んだか、冷やかされて赤面する藤川さんがどんなに可憐だったか、思い出すだけでもなんだか落ちつかなくなってくる。二人はカップルになったわけじゃないけど、やっぱり三野田はショックだろうな。後悔してるかもな。私なんかと組んでしまっただけ。

大きく息を吸い込むと喉から胸までキンと痛むように苦しくなる。風と寒さに負けまいとして思い切り声を張り上げた。ガチャガチャのハーモニード。歌い終わる前に顔を見合わせて大笑いしてしまった。歌っても笑っても息が苦しい。でも、

⑤ なんか楽しい。気分いい。すごく、いい。

「なんで上が下に引つ張られるのさあ」

文句をつけながら三野田はまだ笑っている。明るい顔だ。屈託のない笑顔だ。彼を見ていると、誰が誰を好きとか、申し込んだとか、どうでもよくなってくる。楽譜に二つのパートがあって、二人の人間が声と心を合わせて歌うのだと素直にわかる。

三野田の声はやっぱりキレイだ。風に溶けていくような透明な声だ。寒さにしなびないみずみずしい声だ。私はぜんぜん普通の声だけど、せめて大きく力強く張り上げようと頑張った。何回も繰り返し歌うと寒さも忘れた。喉はガラガラになっただけ。

課題曲は『翼をください』。一番うまいデュエットは、加瀬、磯貝の黄金コンビだった。アイドル加瀬は全部で四度登場して、その都度注2ブーイングを浴びて、ニヤニヤしながら歌っていた。一番冷やかされたコンビは、工藤、藤川組だった。先生に怒られようがテストで零点を取ろうが動じたことのない工藤が緊張のあまり固まってるくに声も出ないのを、藤川さんが一生懸命励ますように合わせていたのは感動的だった。そして、そう、一番ウケたのは、私たちのペアだったよ——たぶんね。

女の子二人のデュエットみたいだったね。下のパートなのに私より絶対に声の高い三野田ととにかくきれいにハモろうとして夢中になって歌ったんだ。目の前のクラスメートもピアノを弾いている先生もみんな忘れた。そこには、三野田と私の二つの声しかなかった。音楽室には屋上のような風がなく、二人の声は溶け合って豊かにふくらみ、大きく響いた。いいハーモニーだったと思うよ。とにかく、すごい拍手をもらった。びっくりしたよ。歓声が起きて、工藤が高らかに口笛を鳴らした。三野田は腕を突き上げてガッツポーズをした。やめてよ。テニスの試合じゃないんだから。私はそんなことできなかったよ。歌い終わってから、急に身体が動かなくなるほどガチガチに緊張したから。

先生が最終的には全員を組み合わせってしまったので、結局あぶれた人はいなかった。ハッピーな人もつまんなかった人もいたと思う。私は——よくわからない。すごく恥ずかしい思いもしたし、すごく嬉しいこともあった。でも、一つだけ確かなのは、⑥このメロディが特別なものになったってこと。デュエットの歌声をきくと一生忘れないな。私と三野田の。藤川

さんと工藤の。そして、クラスのみんなのそれぞれのデュエット。

注1 ハーレム状態：一人の男性の周りにたくさんの女性がいる状態。
(佐藤多佳子著『第二音楽室』所収「デュエット」より)

注2 ブーイング：観客が声を発して不満の意を表すこと。

問1

A	く	C
---	---	---

 にあてはまる最も適当な言葉を次のア～カの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア おせっかいババア イ 気が多い子 ウ 卑怯者
エ 気のきいた子 オ 気づかい姉さん カ 除け者

問2 線部①「ボランティアで工藤くんに行こうかな」とありますが、この場合、「ボランティア」とはどのようなことを表していますか。四十字以内で説明しなさい。

問3 線部②「その目が少しだけ淋しくて」とありますが、藤川さんが淋しそうな目をしたのはなぜだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 次々と男女のペアが決まってく中で、自分はおぼれてしまうのではないかという不安が表情にあらわれたから。
イ 気さくで話しやすいタイプの美緒に比べて、藤川さんは自分のことをとっつきにくいタイプだと思っているから。
ウ 自分が三野田とペアが組めたらいいなとは思っているが、三野田には美緒の方がお似合いだという気もあるから。
エ 美緒が自分のことをビジンさんと言うのはお世辞だとわかっており、自分の容姿にまったく自信を持ってないから。

問4 線部③「これは、そういうことじゃないでしょ？」とありますが、後で美緒は、今回男女がペアを組むことはどういうことだと理解しましたか。「こと」につながるように文中から三十字の部分を探し、最初と最後の五字で答えなさい。

問5 — 線部④「やっぱり微妙に自己嫌悪を感じたのだった」とありますが、美緒が微妙に自己嫌悪を感じた理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 三野田とペアになったことで藤川さんとの関係が気まづくなったから。
イ 結果的に自分が藤川さんが素敵だと思ふ人を奪ってしまったから。
ウ 自分の方から三野田にペアになってほしいと言えなかったから。
エ 自分と三野田がペアになったことに後ろめたさを感じていたから。

問6 — 線部⑤「なんか楽しい。気分いい。すごく、いい。」とありますが、美緒がこのような気分になった理由の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気になっていた三野田とデュエットのペアを組むことができ、二人で歌の練習をするのが楽しくてしようがなかったから。
イ 三野田と二人で思い切り声を張り上げて歌い、ガチャガチャのハーモニーになったのがおもしろくてたまらなかったから。
ウ 三野田と二人で歌の練習をしているとき、三野田の屈託のなさに引きこまれ、歌うことの純粋な楽しさを感じたから。
エ 歌のうまい三野田はじょうずに美緒をリードしてくれたので、練習が楽しく、自分も上達することがうれしかったから。

問7 — 線部⑥「このメロディが特別なものになった」理由として適当でないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 三野田といっしょに、よいハーモニーをつくり出すことができたから。
イ みんなからすごい拍手をもらい、自分の歌唱力に自信が持てたから。
ウ クラスのみんなのそれぞれのデュエットが心に残るものだったから。
エ 本番では周りのことを忘れるほど夢中になって歌うことができたから。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注意) 字数制限のある問題は、句読点や記号なども、一字として数えます。

① 日本の家とヨーロッパの家のいちばん大きな違いは、室内と戸外とのつながり方にある。私たちの住まいは、植物も動物も人間も、もとは同じ根から出た自然のなかの仮の姿で、この世を「注1 終の棲み家」とする人生観のうえに立つてつくられてきた。だから自然の中に溶けこんで、細い木の柱を立て、障子をはめ、縁側をまわす、という形が基本になっている。障子をあげれば自然があつて、戸外の緑と室内はひとりでつながっている。庭は注2 借景でことが足りるし、虫も鳥も家の中に入って来るのを拒まない。山も森も、さらには月でさえも、全体は一つのものだという哲学が基盤になっているわけである。

一方ヨーロッパでは、人間は自然と対立するもので、自然を克服するところに、芸術も文化も生まれると考えた。だから住まいは石やレンガの厚い壁で囲まれているし、重い扉は空気さえも遮断している。インテリアと注3 エクステリアは画然と区切られていて、都市はそのまわりをがんじょうな城壁で囲まなければならなかったのである。

日本のインテリアの特徴は、柱、障子、畳、天井に生物材料を使い、それを白木の注4 テクスチエアで統一しているところにある。人間はもともと生物だから、からだに接するところに生物をおくのがいちばん素直だし、心も休まる。生物材料で囲まれたインテリアは、自然とAとが組み合わせられた空間だから、日本人にとってヒノキやスギの白木の肌は、戸外の緑と同じ意味あいを持っていた。

私は木が好まれたもう一つの理由に、仏教の注5 無常観があつたことをあげてよいと思う。われわれの祖先は自然も社会も常に移り変わるものと悟っていた。その法則にさからわないで暮らしていくのが、日本人の生き方であつた。ヨーロッパでは神の宮居はアテネの神殿のように、永遠にその形を残すものでなければならなかったが、日本では伊勢神宮のように、やがて朽ちていく木でもよかった。

ヨーロッパ的な見方からすれば、二十年ごとに造り換えられる神殿は、原型ではなくコピーだから、価値の低いものと考えるが、日本では芸術も文化も心の中にあると考えるから、形が伝われれば価値は変わらないと思う。すべてのものは人間の命と同じように、限りあるはかないものと知っているから、木のように朽ちて自然に帰っていく素材に、心を惹かれたのである。木は仏教の無常観に通ずる注6 恰好の材料であつた。

以上のように考えてみると、ヨーロッパの「石の文化」「金の文化」に対して、②日本の「木の文化」が生まれた理由を納得することが出来る。だからこそ建物の材料には木のような生物材料が選ばれたに違いない。そして同じ木の使い方でも、自然のままの白木の素肌に心の安らぎを覚えたのであった。ヒノキやスギに触れて暮らす生活は、そうした長い伝統によって生まれたのである。

ヨーロッパでも最近では、コンクリート住宅よりも煉瓦の住宅に人気が戻っているという。イギリスでは特にその傾向が強い。やはりその風土で生まれ、長い伝統でつちかわれたものに帰って行くのが、一番自然の流れであろう。私たちは木を使っている間に、そうした日本人らしい考え方が身について来たのか、もともと日本人がそういう民族だったために木を好むようになったのか、それは私にはわからない。だがいずれにしても互いに影響し合いながら、独特の「木の文化」をつくりあげてきたことは事実であろう。

③家は気候風土と長い生活の積み重ねのなかから生まれてきた文化の産物だから、土地と切り離して考えたのでは意味がない。ということでは、ヨーロッパの家がどんなに立派でも、日本という風土のなかにそのまま移したのでは合わないし、和風の家がいかにも美しくても、ヨーロッパに建てたのでは、住みにくいということである。日本は雨が多いから、家は屋根の大きいのが特徴で、すっぽりと笠をかぶったような形をしている。仏教伝来とともに歴史の始まった日本は、何事も中国の真似をしたが、土間で履き物のまま暮らす生活だけは取り入れなかった。地面から一段高いところに板を張り、そこで生活するようになった。そしてこの板の間を四方に延ばして縁にした。縁とは家の「へり」の意味だが、そこには雨がかかるから、縁先に立てた柱を支えにして軒をかけ、さらにその先に濡れ縁をつくったのである。

軒は深いからなるべく軽くつくらねばならない。そこで小丸太や竹を使って重みを減らした。つまり家の形は中心部に畳を敷いた座敷があつて、そのまわりを縁側がとり囲み、さらにその先に庭と接触する濡れ縁があるというスタイルができあがったのである。中心の座敷は人間がすわる静かな場所で、縁側は通行するところ、屋外は活動の場ということであるから、家は中心部に向かうほどB、外に向かうほどCというように、中心から外に向かつて、BからCへのぼかし模様がつくられていることになる。

④座敷と座敷との間の仕切りは軽いふすまだから、夏になってそれはずすと、風は自由に通り抜ける。日本のように夏の蒸し暑い国ではこれが何よりで、畳の上をすべて吹き込む風は天然冷房の効用がある。高い窓から入って来る風ではそ

の効果はない。伝統の和風住宅では、ふすまと障子はずすと、何本もの柱で支えられた屋根だけが残る。この構造は通風を考えてできた生活の知恵である。「住まいは夏を旨とすべし」という兼好法師の有名な言葉があるが、風通しのよさからいえば、これ以上都合のよいつくり方はない。京都の町屋では間口が狭く、奥行きが深く、左右は隣家とくっついているから、風はいやおうなしに家を縦断する。つまり家全体が風のトンネルになるわけで、それに都合がよいように、部屋と部屋とのつながりには壁がない。このように風の吹き抜けに合わせてつくられた家は、世界的にみてもその例が少ない。

伝統的な日本の家は、どの部屋を何の目的に使うというように固定していない。ただ八畳とか六畳とかいった四角な部屋をタテヨコにつないで、そのまわりをぐるりと縁側でとり巻いたものであった。部屋の中の立ち居ふるまいは全く自由で、どこにすわろうとねそべろうと勝手次第である。

部屋ごとのプライバシーなどは全くないが、そういう住まい方が出来たのは、⑤住む人同士の間にあるルールが存在していたからである。それから日本独特の礼法が生まれ、茶道や華道を芽生えさせる原因になった。部屋には定員がないが「ご順にお詰めを願います」という無言のルールで、混乱はおきなかった。注 融通無碍に対応する柔らかな住まい方が、おのずから身についていたのである。

一方西洋の家は、周囲を厚い煉瓦の壁で囲んで、その内側に部屋を並べ、中心部に動的な廊下やホールをおいた。内から外に向かつて、CからBへという遠心的な配置になっていて、日本の住宅とは正反対のぼかし模様である。

厚い煉瓦壁の家は何百年でももつから、彼らはこれを「不動産」と呼んだ。日本の家は木造だから腐るし燃える。全体が消耗品のなつくりで、耐久性では比較にならないほど短い。だが西洋からの翻訳でこれと同じように不動産と呼び、何の疑問も持たなかったところがいかにも日本的である。

彼らの暮らし方は、椅子、テーブル、ベッド、ソファというように、さまざまな道具を使う。日本式の注 ノーファニチャーとは対照的である。要所要所に道具をおいて部屋の用途を限定すれば、生活は快適なはずだが、好きなどころへ自分の居場所を移すには、家具を移動させねばならず、ときにはそれが⑥足手まといになることもある。

厚いレンガで囲まれた部屋には空気抜きが必要だから、壁に穴をあけた。その風穴がウインドウである。日本の「マド」というのは、二本の木の柱の間が「マ」そこに入れた薄い建具が「ト」で、それから出てきた言葉だから、全面開放を意味し、ウインドウとは本質的に違うものである。

- 注1 終の棲み家…死ぬまで住むべき所。
 注2 借景…庭園外の山や樹木などの風景を、庭を形成する背景として取り入れたもの。
 注3 エクステリア…建物の外側、外観。
 注4 テクスチエラ…表面の感じ。質感。
 注5 無常観…永遠に変わらないものはないという考え方。
 注6 恰好の…適当な。手ごろな。
 注7 融通無碍…考え方や行動にとらわれるところがなく、自由であること。
 注8 ノーファニチャ…家具がないこと。

問1 — 線部①「日本の家とヨーロッパの家のいちばん大きな違いは、室内と戸外とのつながり方にある」とありますが、両者の違いについてまとめた次の文のA・Iにあてはまることばを、本文中から指定字数で書きぬきなさい。

日本の家は室内と戸外が（ア 七字）が、ヨーロッパの家は室内と戸外が（イ 八字）いる。

問2 A にあてはまる「自然」の反対語を漢字二字で答えなさい。

問3 — 線部②「日本の『木の文化』が生まれた理由」について、筆者はどのように考えていますか。次のア～オの中から適当なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 石やレンガに比べ、木には温かみがあり、見た目の素朴な美しさに心が安らぐから。
 イ 木は、生がくり返し受けつがれていくことで、永遠にその形を残すものであるから。
 ウ 木のいつか朽ちて自然に帰っていくところに、日本人は心がひきつけられるから。
 エ 人間と一体化したものととらえている自然の一つである木を身近に感じたいから。
 オ 四季を通して姿が移り変わっていく木に、自然美と仏教の無常観を感じるから。

問4 — 線部③「家は気候風土と長い生活の積み重ねのなかから生まれてきた文化の産物だ」とありますが、日本の昔の家は、どのような気候風土に対して、どのような工夫をしていましたか。文中に書かれていることをまとめて、二つ答えなさい。

問5 B・C にあてはまる、意味が対となる漢字一字を、文中からそれぞれ書きぬいて答えなさい。

問6 — 線部④「座敷と座敷との間の仕切りは軽いふすまだ」とありますが、このような家のつくりの欠点を、文中から十八字で書きぬいて答えなさい。

問7 — 線部⑤「住む人同士の間にあるルールが存在していた」とありますが、住む人同士の間で重んじられたものは何ですか。最も適当な漢字一字を、文中から書きぬいて答えなさい。

問8 — 線部⑥「足手まとい」の意味を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 足や手がつかれてしまうこと。
 イ たいそう不便であること。
 ウ 自由な活動のさまたげになること。
 エ 自分の思い通りにいかないこと。

問9 本文の内容に合っているものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 西洋の家は「不動産」と呼ばれるが、日本の昔の家を同様には呼びにくい。
 イ 西洋の住宅における「窓」は、「間戸」に由来していると考えられる。
 ウ 軒の真下にある部分が濡れ縁で、そのさらに外側につくられたのが縁側である。
 エ 日本の昔の家には、どの季節にも過ごしやすい工夫がほどこされている。

至	⑥	①	シ ユ ウ チ ク
忠 誠	⑦	②	イ シ ツ
宝 庫	⑧	③	シ ン ゼ ン
去 就	⑨	④	シ ョ ウ ニ ン
寸 評	⑩	⑤	ベ ン ゴ

問 1	
A	
B	
C	

[illegible]

問
3

問 4

5

こと

問 5

問 6

問 7

[illegible][illegible]

問 2

問 3

問4

問5 B

C

問 6

問 7

問 8

問 9

受 験 番 号	氏 名